

ここに、東京農業大学造園科学科の百周年記念式典を迎えるにあたり、ご挨拶申し上げます。

本日は、ご多忙にも関わらず江口東京農業大学学長・理事長をはじめ、ご来賓の皆様、今回の百周年記念事業にあたり募金などの多大なるご支援を頂きましたみなさまにご臨席を賜りました。卒業生の方々や元教員の皆様とともに、この日を迎えることが出来ましたことに対し、深く感謝申し上げます。

今から百年前の1924年、大正十三年に造園科学科の前進である東京高等造園学校が、渋谷町常盤松にあった東京農業大学の構内に開校いたしました。

前年の1923年、大正十二年に発生した関東大震災は、東京の過半が炎上する大惨事を引き起こしました。庭園や公園、並木の全滅した状況を前にし、上原敬二先生が、造園技術者養成の専門教育を行うための学校の設立を龍居松之助先生、井下清先生に相談されました。お二人がその趣旨に強く賛同されたことから学校設立へ向けた奔走が始まります。今、新たな挑戦への強い情熱と粘り強い行動力が造園科学科の基盤にあることを私達は再度心に刻みたいと思います。この三人の恩師なくして、今の造園科学科は存在しません。そこで百周年記念の機に、この式辞の後、創立御三家である上原家、龍居家、井下家に対して感謝状を贈呈させていただきます。

さて東京高等造園学校設立のために東京農業大学構内の一教室を借用させて頂き下されたのは、東京農業大学初代学長である横井先生でした。その後、戦争の色が濃くなる1924年昭和十七年に、東京造園高等学校は東京農業大学専門部造園科となることで専門教育の継続が可能となりました。

戦後、農学部造園学科を経て、現在の地域環境科学部造園科学科になり、これまでに卒業生総数一万二千四百三十名を社会に送り出しています。

上原先生が目指した造園学の体系化は、その後多数の専門家によって構築されました。研究室体制の変化はあるものの、造園計画・設計分野、造園植物分野、造園工学分野という大区分のもと、持続的な教育を行なっています。

学科のターニングポイントのひとつとして1959年、昭和

三十四年の江山正美先生学科長就任があげられます。就任後、それまでの近代造園学の立場から、科学的側面を強調し、環境教育学としての造園学が打ち出されていきます。教育面においても学科と学生の学習に方向性を与えるため学科指針の作成・配布など斬新なアイデアが実行されました。今、慣習に囚われず、社会の課題に向き合うことで、造園科学科が変革を遂げてきた姿勢を重んじたいと思います。

1998年、平成十年の学部改組により造園科学科が誕生しました。江山先生などに薫陶を受けた進士五十八先生、近藤三雄先生、蓑茂寿太郎先生などの尽力により、その後造園学が扱う対象範囲がより多様に展開され、地域環境科学への展開も始まります。

そして2024年、令和六年の今、私達は地球温暖化対策や生物多様性戦略、度重なる災害など、より複雑でより深刻な環境状態に真摯に立ち向かう時を迎えています。私達にはこの百年で蓄積した造園学の叡智と技術があります。そして、社会の課題に対し、熱い情熱と粘り強い行動力によって新たな変革をもたらす姿勢を学科の先達から継承しなければなりません。

百年前の震災で焼け果てた大地の復興に対して、東京造園高等学校が緑の持つ多様な可能性で挑んだのと同様、この先の百年に対して造園科学科は持続可能な地域環境の保全・活用とその技術者の育成を目指し、尽力し続ける所存です。

皆様におかれまして、今後ともご指導ご鞭撻賜りますようお願い申し上げます。今日は誠にありがとうございました。

令和六年五月十八日

東京農業大学地域環境科学部造園科学科長

荒井 歩